

“意見”

「処女」彗星と天文月報編集部の役割について

93年1月号のEUREKAの記事中の「処女」彗星をめぐって星空市場で議論がみられます。わたしも2回投稿したのですが受理されませんでした。天文学会年会の折に多くの人の意見を聞いて考えなおしたので、もう一度投稿します。

論点はつぎの2つです。

- (1) 「処女彗星」という言葉そのものの是非と、それを学術用語として使うことについて。
- (2) 天文月報の編集部の役割。

まず(1)について。わたしはこの記事は、読み物としては面白いと思いましたが、ロマンチックな話のなかで「処女」が乱発されているのを読むのは非常に不愉快でした。でもそう感じない人も多いと思うので、なぜ不愉快なのか少し説明します。

日本の女性差別は世界でも有名です。大臣や社長、学長、教授などに占める女性の割合の低さを見てもわかるし、各種のアンケートにも表われています。女性が仕事を続けていくことがいかに大変かは、大部分の男性にはきっと実感できないと思います。その女性ももし科学者とか教授とか、社長とか、めずらしい職業につくときのしんどさは想像を絶するものがあります。それを全く感じない男性がたくさんいるからといって、女性差別が存在しないわけではありません。日本の天文学界も例外ではありません。

日本では「処女」は、家制度の社会のなかで娘をなるべく高値で嫁がせるための方策としてもてはやされ、いったんその家に嫁いだら、その家の家風に完全に染まることが求められていた時代の産物です。女性が何かの付属物ではなく、一人前の人間として存在しようとしている現在では、この言葉は女性の人格を無視したものとして感じられます。男性むけの週刊誌では「処女」が異常にもてはやされていて、これは日本の男性の幼稚さを表わすものだと私は思いますが、それはともかくとして、男の人にとっては「処女」はロマンチックな香りがするかもしれません。でもそのロマンとは何でしょうか。それはちょうど、アメリカ人にとっての「新大陸発見」や西部開拓時代への郷愁に似ていませんか。コロンブスの

アメリカ大陸到達は北アメリカに住んでいた人びとにとっては、白人による迫害の歴史のはじまりなのです。女であるわたしにとって「処女」のつく言葉は嫌な言葉です。「処女峰」は「けがれていない山を自分のものにする」という、いやな連想のある言葉ですし、「処女彗星」にいたっては、「処女である時とそうでない時とでは、性質が変わる」という、女を一人前の人間として見ていない、ナンセンスな意味で使っているようですよね。

さて問題は、このような意味のある言葉を用語として使うことの是非です。女性差別がいまだに強く存在する以上、これらの言葉に傷つく人はたくさんいます。地質学では「処女地」という用語は久しく死語になっているそうです。「処女彗星」も、ほかの言葉で言い替えればすむことなのだし、女性差別が完全になくなる日まで封印すべきではないでしょうか。

さて第二の論点は編集部の責任範囲です。6月号に旧編集部の見解として、天文月報の記事の責任は著者にあり、編集部にはないという意味の文が載りました。これは明らかに世間の常識とは反するものです。雑誌の性格をきめるのは編集部ではありませんか。個々の記事の専門的な内容についての責任は著者にあるのは明らかですが、それ以外の判断は編集部の責任だと思えます。

天文月報の性格はここ10年でだいぶ変わりました。以前は難解な学術論文調のものが多く、教育関係の記事などほとんど載りませんでした。私が1981年に大学の天文教育の事を投稿した時には、教育の記事をのせる是非について、だいぶ議論になったと聞いています。いまでは信じられないようなことですね。わたしが数年前に天文月報の編集委員になった時は、天文教育関係の記事を充実させるというきも入りで編集委員を選んだ年でした。それはオーバードクター問題によって若手の研究者が否応なしに全国的に散らばり、大学での教育問題に直面して教育への関心が高まってきたことを反映していると思います。さらに最近では編集部の努力により月報の記事はぐっと読みやすく、扱う範囲も広くなりました。このように月報の性格は編集部の方針できまるのです。表現の自由は著者にある、なんて言わないでどしどし著者とやりあったらよいと思います。

加藤万里子（神奈川県、慶応大）

編集委員 谷川清隆（編集長）、坂尾太郎、田代 信、中川貴雄、中村 士、濱部 勝、林 左絵子、半田利弘
平成6年1月20日 発行人 〒181 東京都三鷹市大沢2-21-1国立天文台内 社団法人 日本天文学会
印刷発行 印刷所 〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町565-12 啓文堂 松本印刷
定価700円(本体680円) 発行所 〒181 東京都三鷹市大沢2-21-1国立天文台内 社団法人 日本天文学会
電話 (0422)31-1359 (FAX自動切換) 振替口座 東京 6-13595